

## 行為理論における価値について

山 田 良 一

### I 問題の所在

何が現実には人々の日常生活を内面から支えているかという問題の研究意義を見事に例証したものとして、M. ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」があげられる。われわれは、この研究から多くのことを学ぶことが出来るけれども、彼が歴史現象の現実的基盤を行為に求め、それを行為者の主観的意味に関連させることによって解明しようとした方法論は、注目すべきものがある。彼の云う主観的意味とは、人間を行為に駆り立てこれを方向づけるものを表わしており、主体としての人間が行為を選択し決断を下す際にその基準として機能するものであると云い換えることも出来るであろう。

そのような行為における選択の基準として機能するのは、今日では価値概念で考察されているけれども、ウェーバーの方法論がそうであったように、行為を分析の単位としながらも微視的観点に没するのを避けて、個人—文化—社会の相互連関において考察し、価値現象に関する一般的・原理的な枠組を構築すべく試みたいと思う。

### II 行為の基本的構成要素について

価値現象の具体的な現実的基盤を行為に求める時、先ず、行為の構造分析に必要な基本的構成要素を抽出し整理することが必要であろう。この作業に有効と考えられる諸理論や図式は、多くの分野に見出すことが出来るようであるが、ここでは比較的広い分野で問題にされているものから学びたいと思う。

一般に、人間の行動の第一原因としては、なんらかの〈欲求〉の存在が仮定されているけれども、これだけでは行動の具体的な形式を説明するには不十分である。B. マリノフスキーやR. リントンのような文化人類学者たちは、人間の行動の本質を文化との関連で把握しているが、彼らは、社会的存在としての人間の欲求は文化と呼ばれる行動様式に従って充足されるということを強調している。例えばマリノフスキーは、人間の基本的要求は文化的反応という形式において追求されると定式化し

ている。

しかし、文化を単に個人の外側に位置づけて考察するだけでなく、主体的な行為者との関連において把握しようとするなら、S. フロイトの自我論に示唆されるように、個人の内側において扱わねばならない。個人が学習する文化とか社会的規範は、その社会の成員によってすでに評価が与えられているのであるから、それを習得する個人は同時に社会的価値も身につけ、それが行動の決定に介入してくる。

さらに行動は、真空の中でおきるのではなく、環境とか状況の中で発動され、状況の中の〈客体〉とのなんらかの予期された事態である〈目標〉に方向づけられている。

以上の〈欲求〉〈価値〉〈客体〉〈目標〉の4つを行為の基本的構成要素と名づけ、それらの要素の相互連関の枠組で行動を問題にする時、その行動を行為と呼びたい。

### III 行為における〈価値〉について

ここで問題にする行為は、目標志向的行為であるが、そこにおける価値の機能を考察するには、この行為の一般的性質をより詳細に検討する必要がある。

この点に関して最も包括的な理論を展開しているのは、T. パーソンズらであろうが、本論ではほぼ彼らの理論を参照にして考えてみたい。

一般に人間の目標志向的行為は、その本性上具体的なものであるが、だからといって行為者が置かれている状況は、最初から確定的な意味を持っているわけではない。状況はきわめて複雑で多数の異質な要素を含んでおり、容観的にはいくつかの行為の可能性が開かれているから、行為者は未確定性から派生してくる諸問題を解決しなければならない。

そのような問題の内容は、行為の志向の様式を分析的に区別することによって規定することが出来る。先ず、一定の目標設定に関連した側面として、(1)客体をどう認知するか、(2)客体にどのようなカセクシスをそそぐかという認知的—カセクシス的側面が含まれる。次に、目標達成の為の行為のコースに関連した側面として、(3)行為

の可能なコースから具体的に決定するという評価的側面が含まれる。ここで問題の解決とは、行為者に開かれている可能性を限定しながら選択することを意味しているが、行為の選択過程において基準として機能するのが価値である。従って、価値とはその時々欲求の対象ではなく、選択過程を規制することによって一連の行動を支配し方向づけるものである。

先の志向の諸側面は、行為者の処理すべき問題領域を指示するものであるから、特定の価値が主としてどれに介入してくるかに従って、分類することが出来る。

- (1) 認識的価値標準…これによって客体—志向の真偽が判定される。
- (2) 観賞的価値標準…これによって目標—客体の適切さが判定される。
- (3) 道徳的価値標準…これによって行為のコースの道徳性が判定される。

行為者は、志向の諸問題を解決する為にこれら三種の標準に従うが、同じ程度に重視するのではなく、ある標準に他のよりも優位性を与えるであろう。この価値志向に一貫したパターンがある時、それに対応する主体的な要因を価値意識と定式化し類型化出来よう。この方法論をパーソンズらの5つの「パターン・変数」に求め検討した結果、有効な変数は(1)自己中心的志向—集合体中心的志向と(2)普遍主義—個別主義の二つが取り出せた。それらを組み合わせることによって、4つの基本的な価値意識の類型が得られる。

- (1) Aタイプ…自己中心的志向と普遍主義によって特徴づけられるタイプ
- (2) Bタイプ…自己中心的志向と個別主義によって特徴づけられるタイプ
- (3) Cタイプ…集合体中心的志向と普遍主義によって特徴づけられるタイプ
- (4) Dタイプ…集合体中心的志向と個別主義によって特徴づけられるタイプ

#### IV 社会における〈価値〉について

価値の一般的機能は、行為における選択の基準として作用することにあるが、価値は人間に生得的に与えられているものではなく、社会的存在としての人間が学ぶべきものとして云わば外側にある。従って価値の性質をより理解するためには、文化—社会のレベルで考察することも必要であろう。このことはまた、諸個人にとっての価値の外在性の問題と、価値の文化的多様性の問題からも要請される。

しかし、ここでの主たる関心は、文化・社会そのもの

にあるのではないから、行為の総合理論を展開することによって行為の微視的立場と文化・社会の巨視的立場を接合しようとしている T. パーソンズらの理論に主として準拠しながら考察したい。

文化は、人間の行為と志向のパターンに関するシンボルの体系であると考えることが出来るから、志向の諸様式に関連させることによって次のように文化の諸要素を分類することが出来る。

- ① 認識的記号 { 経験的側面…科学・技術  
非経験的側面…世界観
- ② 表現的記号 …………… 芸術・娯楽
- ③ 評価的記号 { 認識的標準  
(価値体系) { 観賞的標準 法・道徳など  
道徳的標準

この評価的記号は、行為の志向に固有な諸問題を解決する仕方であるから、他の記号と異なって直接行為に関連しているように思われる。社会体系は二人以上の諸個人の相互作用からなる体系であって、その体系が効果的に目標を達成するには、相互作用のパターンが安定し維持されることが必要である。この必要を満たすのが文化であるが、特に評価的記号は、体系の部分である単位の行為と志向に固有な諸問題を、体系の維持・安定の観点から解決し、同時にそれらに正当性を付与するという機能を持っている。なかでも、道徳的標準は、真に評価的諸問題の解決の仕方であるから、他の記号や標準に依存しながらも、それらを組織し、体系の統合的問題に寄与するのである。

従って、道徳的標準は、社会体系の機能的問題の実用的解決を担うものだと云えよう。そこで、社会体系の機能的諸問題を明らかにすることによって、道徳的標準の具体的内容を規定することが出来ると考えられる。